1 国　語　科

羽場邦子・曽根照三・福島靖之

はじめに

現代は，マスメディアの発達により言語生活が大きく変化している時代であると言えよう。その基盤となっているのが，社会生活における情報伝達方法の大きな変化である。葉書や手紙による意思伝達から，電話によるコミュニケーションへ，筆記用具による表現活動からワードプロセッサーへ，活字を読む時代から映像中心の情報を見聞きする時代へと変化してきた。このように言語環境・言語生活そのものの変化がまちがいなく進んでいる今日，国語科教育も既成の学習内容の伝達だけでなく，望ましい方向への軌道修正に向かって努力する必要があると考える。

教育の内容も，既成の文化を情報として効率よく伝達することから，文化を創り出すもととなる一人一人の思考力や想像力を身につけさせることへの質的変換が求められている。そのため，原点にたちかえり，児童各自が持っている力を，可能な限り引き出すことに全力を注がなければならない。

「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに，基礎的・基本的な内容の指導を徹底し，個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」という学習指導要領「総則・第１の１」を受けて，特に次の３点に重点を置き実践を進めてきた。

(1) 情報処理能力の育成

社会の変化に主体的に対応できる能力として今後要求されるのは，情報に対する諸能力である。特に，情報処理能力の育成は重要である。言語情報を処理する上で，理解力，認識力，分析力，判断力，選択力のある主体の育成が必要となる。

(2) 国語の能力を的確に身につける授業の創造

国語科には，国語科の授業でなければ身につけることのできないことがある。それは，言葉の学習ということである。言葉のきまりや働きをふまえて正しく文章を読み取る力，豊かな文章を書く力，分かりやすく話し聞く力，それらの能力を的確に身につけることが国語の学習である。充実した授業の創造をわたしたちはめざしている。

(3) 子供が自ら学びとる授業の創造

学習の主体者は，一人一人の子供である。その子供たちが，自ら意欲を持って積極的に学習に取り組み，自らの持つ力を存分に発揮し，自らの力で学習を切り開き高め合っていくような授業づくりこそ必要である。教師中心の教え込み，知識注入式の授業からは，生き生きとして一人一人の子供が躍動するような魅力ある授業は生まれない。

1．個が生きる授業の評価

昨年度，学習の主体者である一人一人の児童に目を向け，「個が生きる国語科の授業の評価」について取り組んできた。「個が生きる授業の評価」とは，児童の個人差に対応した学習を児童自身が振り返り，向上した自分に気付くことのできる評価過程ととらえている。具体的には，友達の意見についてそのよい点を評価する相互評価や，友達とかかわりながら変わってきた自分について評価する自己評価，教師から与えられる形成的評価などが挙げられる。個が生きるためには，これらの評価は常に肯定的・支持的でなければならない。その評価が記録され，確かな形として残っていくことで自己が向上する喜びが生まれてくるのである。

昨年度までの積み上げにより，児童が自己評価をし，それをノートに記録していくことで，向上する喜びを感じることができるようになってきた。しかし，それだけでは自ら学び，進んで自己を高めようとする意欲を持たせるまでには至らなかった。次のようなことがらが，その原因として考えられる。

① 学習の明確な見通しがなければ意欲が持続しにくい。

② お互いに向上していることを認め，ともに喜び合える受容的な学級風土がなければ，意欲は減退してしまう。

これらの課題を解決していくことが，「自己を高める評価力の育成」につながっていくものと考える。

国語科では，以上のような考えに立ち，次の点に留意して言語による学習活動の楽しさを味わい言語活動によって自らを高めようとする意欲のある児童を育てていきたい。

① 個に着目し，個性を生かす学習内容を重視する。

② 個が高まり，自ら学ぶ意欲を持つことができる評価のあり方を追求する。

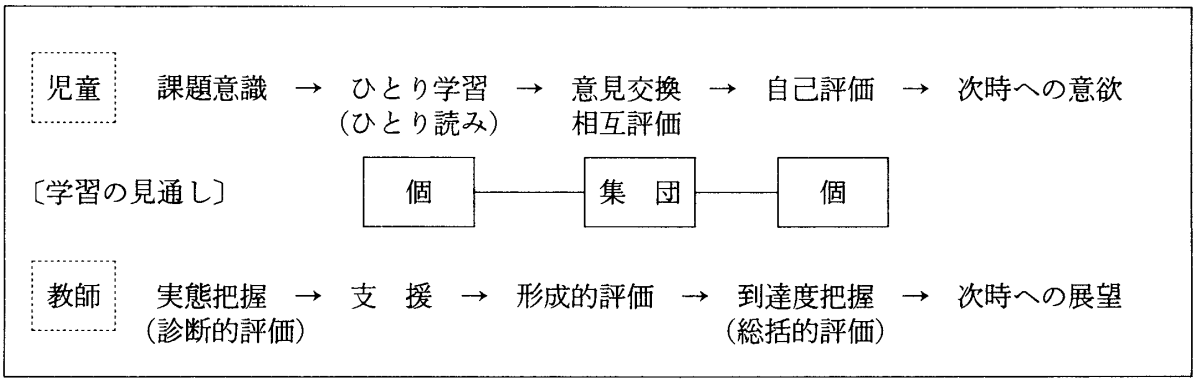
③ 学習の計画を明確に示し，児童が見通しを持って学習できるようにする。

④ 評価の場を保障し，個の高まりを学級で認め合う場を積極的に設けていく。

2．実践にあたって

(1) 評価活動の位置づけ

一つの授業の中に，児童並びに教師の評価活動を次のように位置づけていきたいと考えている。



このように，学習は個の読みに始まり，集団の中で評価されて高まり，再び個に返される。個の考えの妥当性は，集団のフィルターにかけられることによって確認される。その際，児童の立場からみれば，形成的評価がなされることになる。評価のあと，個の読みは強化・深化され，確かな考えとなり次の学習に生かされる。

(2) 実践の方向性

適切な評価によって，学習に対する意欲・関心・態度を高めていくことをめざす。そのために，次のようなステップをふまえるよう心掛ける。

① 児童による相互評価，教師による形成的評価によって，自己の考えを高めたり，自己評価の仕方を学んだりすることができるようにする。

② 自己評価をすることにより，自己の高まりを自覚できるようにする。

③ 学習の見通しをもつことによって，学習への意欲を持続できるようにする。

④ 主体的に学習に取り組む能力をつけることによって，自学自習の習慣を身につけさせ，言語による自己実現ができるようにする。